

委員会行政視察報告書

大崎市議会 調査活動概要報告書

1. 視察概要

委員会名	建設常任委員会
委員名	青沼智雄、氷室勝好、加藤善市、遊佐辰雄、山田和明、後藤錦信、山村康治
日時	平成 27 年 11 月 4 日(水)～11 月 6 日(金)
視察先	①青森県青森市、②北海道北斗市、③北海道苫小牧市
出席者 (説明者)	①青森市:大矢議長、東條都市政策課主幹、阿保石江区画整理事務所主幹、 櫻庭石江区画整理事務所主査 ②北斗市:池田議長、滝口副市長、梅田建設部長 ③苫小牧市:金沢議会事務局長、武田まちづくり推進課主幹

2. 視察内容

視察項目	①新青森駅周辺整備事業について(青森県青森市) ②新函館北斗駅周辺整備について(北海道北斗市) ③まちなか再生総合プロジェクトについて(北海道苫小牧市)
視察内容 【質疑応答】	①新青森駅周辺整備事業について 青森市は平成 17 年 4 月に旧青森市と旧浪岡町の新設合併により、青森県初の 30 万都市となり、平成 18 年 10 月 1 日に中核市となりました。 青森市の新幹線整備については、昭和 48 年に北海道新幹線(青森・札幌間)整備計画と東北新幹線(盛岡以北)整備計画が決定しましたが、昭和 57 年に整備計画が見合わせられました。しかし、昭和 62 年に閣議決定により計画見合わせが解除され、平成 10 年から新幹線工事がスタートしました。平成 17 年には新青森駅舎の建設が始まり、平成 22 年 12 月に東北新幹線が開業しました。 新青森駅は昭和 55 年にJR奥羽本線青森駅から津軽新城駅間に設置することが決定し、ルートや建設費の問題もあり、青森駅のある市中心部から約4キロメートル離れた場所に建設されました。 青森市は、平成 11 年策定の都市計画マスタープランにて全国で初めてコンパクトシティという言葉に掲載した市でもあり、総合計画では、今後の青森市の都市づくりの基本的考え方として、「人と環境にやさしいコンパクトシティ」を掲げ、青森駅を中心としたまちづくりを位置づけるとともに、都市拠点整備の基本方向を示しています。新青森駅周辺地区は、都市拠点の一つであり、新たな広域交流の玄関口として整備が進められています。計画では、快適都市ゲートウェイと位置づけ、大規模な商業施設や業務施設の導入は行わず、中心市街地等との役割分担を明確化し交流施設整備や土地利用への誘導、青森らしさを象徴する景観誘導等による地区整備が進められています。

全ての交通機関がここに集まるという「総合交通ターミナル」という位置づけで、駅西口には16億1千万円をかけて1,000台収容の立体駐車場を整備し、また東口と南口には利用者の安全面を考慮して、観光バス、タクシー等の公共交通と一般車を分離した東口駅前広場と南口駅前広場を整備し、総合交通ターミナル機能の強化を図っています。

また、広域交流の玄関口として、交流観光案内と交通案内を一元して行う青森市観光交流情報センターも駅中の市の所有地に1億1千万円で整備しました。

こうした土地区画整理事業に総額176億円を費やしていますが、土地区画整理事業で残った保留地の処分は10年という長いスパンで考えており、10年で約半分が売却済みとなっています。今後も一般保留地購入助成、一般保留地商業施設等開設支援事業補助金、一般保留地あっせん事業、一般保留地販売促進助成金の4つの販売支援策で保留地の売却を進めています。

青森市は新青森駅の建設に当たり、平成14年ころに古川駅を含めいくつかの新幹線駅及び駅前を視察したそうですが、古川駅周辺整備状況は失敗例と捉えていました。失敗例、成功例を分析してコンセプトをしっかりと持ち、駅、駅前広場の整備を行っています。駅舎のデザインコンセプトは「縄文から未来へ。ほっとして郷愁が感じられるあずましい北の駅」とし、縄文と未来の融合をイメージした駅舎になっています。駅前には「縄文の息吹を感じ、雪を知る新幹線新青森駅周辺整備」とし、ゾーン別空間整備方針により青森の豊かな自然と文化とのつながりを表現しています。

また、駅前には青森を象徴する県の木、ヒノキアスナロを植樹したシンボルツリーや「空と森」、「夏と冬」2つの対となる自然の反射をテーマにした鏡面モニュメントがあり、自然を大切にしたい景観づくりを行っています。

北海道新幹線の開通をまじかに控えていることから、新青森駅が単なる通過駅とならないようにするために、青森駅、新青森駅を中心としたまちづくりと、そして新幹線を利用した観光客誘致に力を入れています。中心市街地である青森駅周辺の青森ベイエリアには、年間20万人を越す入場者があるねぶたの家ワ・ラッセやA-FACTORY(工房と市場)、青森県観光物産館アスパム、青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸などの観光施設を配置し、新幹線を利用した観光客の市街地への誘導が図られています。

②新函館北斗駅周辺整備について

平成18年2月1日に旧上磯町と旧大野町の新設合併により北斗市となり、人口は47,769人(平成27年4月1日現在)となっています。

平成17年4月、道民の長年の悲願であった北海道新幹線の着工が決まり、新駅が北斗市に設置されることになりました。現在、北海道新幹線の新青森駅から新函館北斗駅までの149キロメートル区間が、平成28年3月26日の開業に向け、急ピッチで新駅及び周辺整備が進められています。

北斗市に置かれる新駅は、北海道新幹線の当面の終着駅となり、北海道の玄関

口、そして南北海道の交通拠点となることから、開通に合わせ、新駅南側 13.5 ヘクタールについて土地区画整理事業において、商業用地となる宅地造成工事を行っています。

北斗市は隣接市に函館市という有名な観光地やスキー場などがあり、新駅ではピーク時で1日1万人の乗降客が見込まれることから、新幹線等の利用者の利便性を一番に考え、レンタカーや観光バス、タクシーなどの交通アクセスの向上策と、さらに普通乗用車 580 台収容の立体駐車場と 20 台分の観光バス専用駐車場が整備されています。

また、公共施設では街路や公園を初め、駅舎前には乗合バスやタクシー乗り場が整備されています。平成 24 年度から順次造成された商業用地には、ホテルや小売、飲食店、オフィスなどの立地を促進していますが、大規模な開発とはせずに建築物の用途や形態などについては、都市計画でルールを定め、新幹線駅前にふさわしい適切な都市機能の誘導を図っていくとのことでした。

さらに、北斗市では新幹線開業効果を地域経済の活性化に結びつけるために、第1種事業または第2種事業の特定の事業を行う企業に対し、土地取得費を含む建築費や土地、建物賃借料などを助成する「北斗市新幹線新駅企業立地助成制度」を創設するなど企業立地に力を入れています。

③まちなか再生総合プロジェクトについて

昭和 23 年に市制が施行され、製紙工場を中心に工業都市として発展してきており、平成 27 年 3 月 31 日現在、面積 561.57 平方キロメートル、86,571 世帯、173,640 人の人口となっています。

これまで、JR 苫小牧駅を中心とする中心市街地の活性化について、さまざまな取り組みが行われていますが、市街地の拡大整備やモータリゼーションの進展に伴う商業施設等の郊外立地、情報化社会の進展による消費者動向の変化等により、衰退に歯どめがかからず、抜本的な解決策が見出せない状況が続いていました。

このような中で、平成 21 年度にプロジェクトチームを立ち上げ、さまざまな市民参加の機会を通じて提出された意見、提案を踏まえ、平成 23 年 6 月に「まちなか再生プロジェクト(CAP)パート I」が策定されました。

この計画では「長期的な都市運営の観点からまちづくりの考え方を見直す」という基本理念に基づき、スピード感を持ってさまざまな事業に着手しましたが、目まぐるしく変化する社会情勢の中では柔軟な対応も必要となり、平成 26 年度から平成 28 年度を事業期間とする「まちなか再生総合プロジェクト(CAP)パート II」を策定し、パート I で着手した事業の普及、発展を目指す一方で、事業のスクラップ・アンド・ビルドにも取り組むとともに、まちづくりに携わる人材の育成やネットワークの強化に着手し、町なかを暮らしやすい生活空間へと充実させ、定住人口や交流人口の増加について3つの基本方針を掲げて目指しています。

	<p>基本方針1には、にぎわい創出として、東胆振地域ブランド戦略事業、まちなか交流センターの開設、マルシェ(地場産品販売)事業、「まちなか交流館」連携事業、空き店舗活用事業、苫小牧駅前周辺再整備事業等の事業を積極的に展開することで、地域ブランド戦略による地域活性化、商業の活性化に取り組んでいます。</p> <p>基本方針2には、まちなか居住の推進として、市営住宅の建てかえ事業において、その一部を町なかに移転する取り組みを行っており、今後も市営住宅も含め、町なかへの建設の可能性について検討しているとのことでした。</p> <p>また、まちなか居住支援事業として、町なかに賃貸住宅を建設する事業者に対して、その費用の一部を助成(1戸当たり100万円)する制度を創設する等の取り組みを行っています。</p> <p>基本方針3には、公共交通の利便性の向上として、町なかの主要施設を結ぶ循環バスの導入への期待が高いことから平成27年度より本格運行しています。また、郊外から町なかへ移動する公共交通の利便性を高める必要があり、さらに町なかと郊外との相互の交流促進にもつながることから快速バスの導入を目指しています。</p> <p>これらの取り組みにより、まちなか居住人口が減少傾向から増加に転じているとのことであり、苫小牧市総合政策部まちづくり推進室を中心とした横断的な強い連携と市民参加による積極的な思い切った事業の取り組みがなされています。</p>
<p>考 察</p> <p>【所感・課題 ・提言等】</p>	<p>本市においても、交流人口の増加や空き店舗の活用、中心市街地の再開発など、まちなか再生に向けた取り組みが重要課題として山積していることから、今後尚一層の各部の連携と市民との協働を進めながら、駅前周辺の整備について将来を見据えた再開発や新たなまちづくりに着手していかなければならない。</p>

以 上